

高知市種崎における里海の鳥類相

楠瀬雄三¹⁾・福井 亘²⁾

(高知大学大学院総合人間自然科学研究科 / ひとく地域研究員¹⁾
京都府立大学大学院生命環境科学研究科²⁾)

はじめに

近年、薪炭林・水田・茅場・集落の集合体としての里山は多くの希少生物の生息地として注目され、植物、鳥類、昆虫類、ほ乳類、両生類、は虫類などの分類群を対象として盛んに研究が行われている。一方、生活に対する海の影響が強い地域は里海と呼ばれ、里山と同様に、人の働きかけによって生じた自然には固有の生態系が存在する。里海には、海浜、クロマツ林、畑地、丘陵地などの景観が含まれているが、これらを一体として捉え、生物群集との関係性を調べた研究は行われていない。そこで、本研究では、里海の生態系を明らかにする一環として鳥類の群集構造を調べた。

調査方法

調査対象地は高知市種崎とした。2012年4月から2013年3月にかけて、月に1～2回、晴天の条件下で、調査者1名が、6時から10時の間の約1時間30分、約2km/hで歩行中に半径25m内に見られた個体の種名と個体数を記録した。調査対象地は、クロマツ林(ルート延長804m)、海浜(同1136m)と宅地や畑地を含む後背地(同881m)の3つに区分した(図1)。繁殖期は4月から7月、越冬期は10月から3月とした。

調査の結果

繁殖期には、ハシブトガラス、ムクドリ、ヤマガラはマツ林に多く出現したが、越冬期にはムクドリとヤマガラはマツ林に加えて後背地でも個体数が多く、ハシブトガラスはマツ林のほか海浜で個体数が多かった。また、トビとヒバリは繁殖期には海浜で多かったが、越冬期にはトビはマツ林や後背地での個体数が増加し、ヒバリは確認頻度が低かった。越冬期、繁殖期ともにカワラヒワはマツ林に多く、キジバトとコゲラはマツ林と後背地で個体数が多かった。夏鳥の個体数は、シロチドリとオオヨシキリは海浜で多く、エゾムシクイとセンダイムシクイはマツ林で多かった。冬鳥の個体数はツグミは全ての環境で個体数が多く、ジョウビタキとハクセキレイは、シロハラ、アオジは後背地で多かったほか、シロハラはマツ林でも個体数が多かった。キクイタダキはマツ林にのみ出現した。

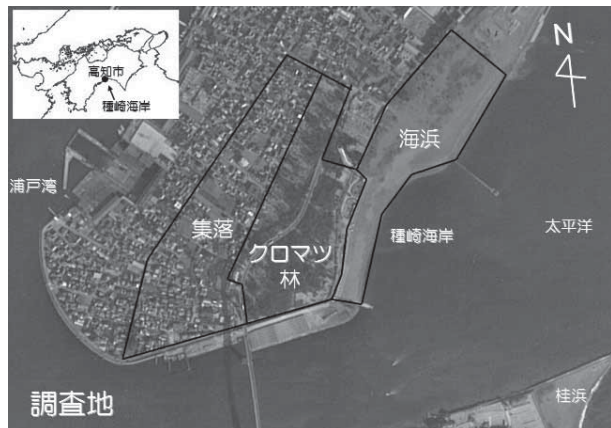


図1. 調査地

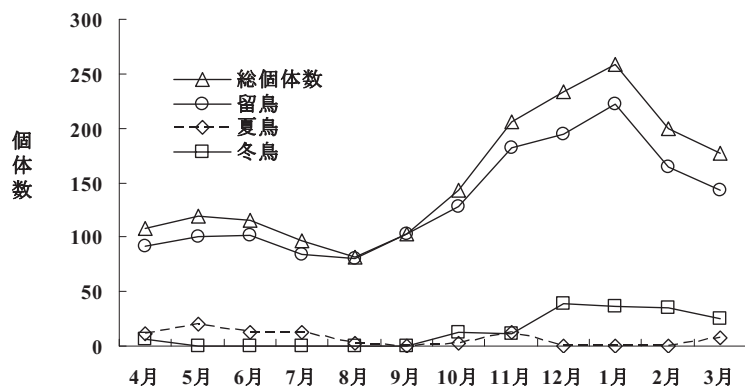


図2. 月別の個体数